

全学共通教育の平成21年度実施に 向けた研修会 (FD) 報告

大学教育開発センター調査研究部編

第1部「全般的課題」では全学共通教育の全般的課題と各学部のFDについて整理し、あわせて、現在進んでいる競争的資金等による全学的取組みを紹介した。続く第2部「分科会」では授業担当者を中心に六つの分科会に分かれて、より具体的な討論と情報交換をおこなった。

プログラム

日時：平成20年12月16日（火曜）13：30～17：00

場所：教育学部621講義室ほか

対象：全教員（特に、平成21年度全学共通教育担当予定の先生方）

第1部 全般的課題

1. 全学共通教育の現状と課題
2. 各学部におけるFD実践
3. 学生支援GP紹介「主体性の段階的形成支援システム」
4. 「四国の知」を集積するためのe-Learning・遠隔講義環境の整備
5. オリエンテーション：来年度へ向けた事務的手続の方法など

第2部 分科会

- A. 主題科目分科会：授業実践例の紹介と討論
- B. 教養ゼミナール分科会：授業実践例の紹介と討論
- C. 既修外国語（英語）分科会：習熟度別クラス編成について
- D. 初修外国語分科会
- E. キャリア教育分科会
- F. FD分科会：今後のFDのあり方について（情報交換と討論）

以下、当日の提題者と書記が中心となって報告原稿を作成し、研修会の企画・実施にもあたった大学教育開発センター調査研究部が編集をおこなった。

【大学教育開発センター調査研究部】柳澤良明（調査研究部長・教育学部）、川田学（教育学部）、中島洋樹（法学部）、植木英治（経済学部）、木村正司（医学部）、中西俊介（工学部）、奥田延幸（農学部）、羽白洋（大学教育開発センター）、松根伸治（大学教育開発センター）、葛城浩一（大学教育開発センター）、細谷謙次（修学支援グループ）

【その他の執筆者・資料提供】中谷博幸（共通教育部長・教育学部）、西本佳代（教育・学生支援機構）、林敏浩（総合情報センター）、山田仁一郎（経済学部）、瀬戸郁子（教育学部）、長井克己（大学教育開発センター）、津田弘道（キャリア支援センター）

FD研修会報告 第1部・全般的課題

司会：松根伸治（大教センター）、記録：奥田延幸（調査研究部委員・農学部）、松根伸治

1. 全学共通教育の現状と課題

中 谷 博 幸（大教センター共通教育部長）

来年度はカリキュラム上の大きな変更点はない。「教養ゼミ」「主題科目」に関して、科目の性質上、特定の学部生や専門分野を念頭においた講義内容は望ましくないことがあらためて指摘された。また、教養教育と専門教育との連携をはかる「高学年向け教養科目」の課題として、受講生の量と質の確保、各学部のカリキュラムにおける明確な位置づけ、卒業要件への算入などが挙げられた。最後に、今年度から開始した「瀬戸内研究講義群」が紹介され、香川大学の特色ある講義群として充実させるためには今後全学的な取組みが必要であることが説明された。

2. 各学部におけるFD実践

柳 澤 良 明（大教センター調査研究部長）

法令によるFDの義務化にともない、情報の共有化をはかる目的で各学部におけるFDの取組みについて説明された。全国的な実施状況では、「講演会等の開催」や「教員相互の授業参観」などが高い実施率であるが、本学では各学部の実情を踏まえてFDが実施され、例えば教育学部では新任者向け研修会の実施、医学部では研修をもとにしたプロダクト作成など特徴ある取組みがなされていることが紹介された。これからのFDでは、「FDの実質化」、「教職員の能力開発」および「大学間の協同の必要性」について取組むことが重要になると提案された。（以下、当日提示資料から要点を抜粋）

1. 各学部FD取組の特徴

- ・教育学部……新任研修会の実施
- ・医学部……研修をもとにプロダクト作成
- ・法学部……出席率100%
- ・工学部……学科毎に実施
- ・経済学部……授業評価アンケートの活用
- ・農学部……教育センターを設置

2. 授業公開事例紹介

- ・授業公開ウィークを設けている（教育学部）→翌週に公開ウィーク振り返りFD
- ・録画による授業公開（法学部）→教員・学生への不要な圧迫の軽減、編集視聴による効率的時間配分

3. 法令によるFDの義務化

- ・1999年 9月 大学設置基準等で努力義務化
- ・2003年 4月 専門職大学院設置基準で義務化
- ・2007年 4月 大学院設置基準で義務化
- ・2008年 4月 大学設置基準等で義務化

第25条の3「大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」

4. これからのFD

- ・ポイント1 求められるFDの実質化
- ・ポイント2 職員の能力開発
- ・ポイント3 大学間の協同の必要性

2008年3月中教審（審議のまとめ）「学士課程教育の構築に向けて」より

3. 学生支援GP紹介「主体性の段階的形成支援システム」

西本佳代（教育・学生支援機構）

今年度、本学は、「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に「主体性の段階的形成支援システム（CPS）——「支援される学生」から「支援する学生」へ」という取組を申請し、採択された。このプログラムは、全国230件の応募のうち本取組を含めわずか23件という狭き門を突破し、採択されたものである（平成20年度）。以下では、この取組を構想するに至った背景とその理念、及び取組における四つの柱、具体的内容の大きく三つに分けて説明する。

1. 構想の背景・理念

本学は、大学憲章に「地域に根ざした学生中心の大学」、「社会の期待に応える有為な人材を育成する」とうたっており、これまでも、修学や生活支援等、学生支援の充実に積極的に取り組んできた。また、平成19年4月には、総合的な学生支援体制を整備するため、教育・学生支援機構を設置しており、そうした組織を通し、今後とも、こうした従来型の学生支援をより一層充実していくことが求められている。

しかし、それだけではなく、さらに社会の大学に対する期待に応えるためには、主体性を持って社会の様々な課題に挑戦する学生を育てることが重要になると考えられる。そこで求められるのが、学生を「大学から支援されるお客様（客体）・受益者」と捉える従来の学生支援から一歩踏みだし、学生を「他者を助け支えることのできる存在」として育てる学生支援を展開することである。すなわち、他の学生を助け支える支援行為が主体となることを通じて、本学の学生一人ひとりの人間

的成長を促すという視点を、従来の学生支援に加えることが必要とされているのである。

こうした従来の学生支援に教育的視点をビルトインした取組は、学生支援概念を拡大するものである。この学生支援概念拡大の主要なポイントは、「与える」学生支援から「育てる」学生支援へ、他者を助け支えることのできる学生の育成、学生の人間的成長・主体形成の促進の三点である。こうした新たな学生支援の概念に基づいて、教育・学生支援機構はCPSという認証システムを構想した。

2. CPSにおける四つの柱

CPSでは、学生支援という概念の拡大を、さらに具体的な四つの柱として計画している。具体的には、①学生支援活動と教育活動の融合、②学生を支援行為主体に、③学生の地域社会貢献力、④教職員の協働、という四つの柱である。CPSとはCertificate for Peer Supportの頭文字である。ピア・サポートとは、援助のための訓練を受けた同年代の仲間が、問題に直面している仲間を支援する活動のことを指す。本取組では、そうした活動を行う学生を、大学が認証することによって学生の主体性形成を促進する。

具体的には、CPSでは、まず、支援活動を行う基礎能力であるコミュニケーション能力やファシリテーション能力などの向上を目指す科目や講座を受講した学生に一定の認証を行う。そして、実際の学生支援活動などに参加した学生にはさらに上級の認証を与えるというシステムをとる。なお、CPSは、その語感からもわかるように、GPSをモチーフとしており、本学の学生を学生支援という視点から全学的に把握するという意味も持ち合わせている。

3. CPSの具体的内容

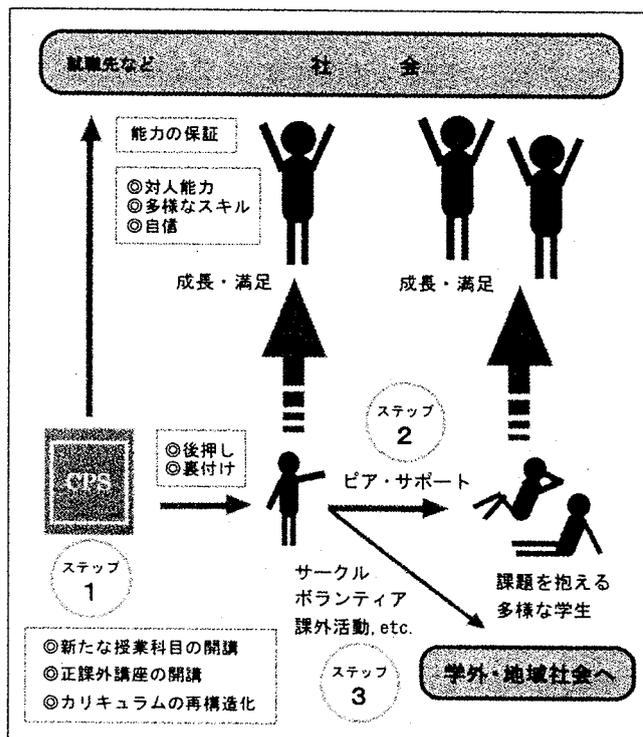
先述した四つの柱のうち、CPSの基礎となるのが、①学生支援活動と教育活動の融合、②学生を支援行為主体に、の二つである。一つ目の柱では、学生支援に関わっていく上で特に必要となる能力の向上をめざす正課科目や正課外講座を学生に対して提供し、それらの能力を教育課程の中で体系的に養成することをめざす。例えば、「キャンパスライフを考える」という正課科目を修了した学生には「Bronze Certificate」が授与される。そして、これに加えて、「ファシリテーション能力養成講座」という正課外講座を修了した学生には「Silver Certificate」が授与される。

一方、二つ目の柱では、学生を支援行為主体者として位置づけることで、人間的成長を促すと同時に、学内の学生支援力を総体として高めることをめざす。具体的には、「Bronze Certificate」と「Silver Certificate」を授与された学生は、例えば、新入生を対象にした履修ガイダンスの企画・運営などの学生支援活動を経験することで、「Gold Certificate」が授与される。これがCPSの一連の考え方である。

このように、CPSとは、他者を助け支えることを通じて、学生自身が人間的に成長することをめざす取組である。そのため、学生による支援行為は、学内のピア・サポート活動に限定されるものではない。そこで、三つ目の柱「学生の地域社会貢献力」では、すでに地域社会をフィールドとして行われている活動や、地域社会のニーズに沿った活動への学生の参加をうながす。学生による支援活動のフィールドを地域社会に拡大することで、学生の「地域社会貢献力」を育成し、学生の能

力の多面的な育成を目指す。

上述の説明からも分かるように、CPSは、学生の活動を単発的、個人的ものに終らせないために大学が継続的な裏づけと後押しを行う仕掛けとしての機能を持っている。加えて、社会や学生の就職先に対して、「この学生はしかじかの能力やスキルを備えています」ということを目に見えやすいかたちで保証するという機能も持っている。例えば、大学仕様の履歴書にCPS記入欄を設け、就職活動時などの提出書類に添付できる推薦書を発行する等の手立てを考えており、これらを通して、学生の活動を後押しすることがより一層可能になると考える。



最後にこのシステムの効果的な実施を保障するための、教職員の協働について説明したい。学生を「支援行為主体者」と位置づける本取組では、教職員の学生支援技能の高度化が要求される。そのため、教職員の意識改革と具体的な支援技能の向上につながる研修体系の構築が必要となる。すなわち、従来の Faculty Development や Staff Development の枠組を越えた Professional Development を視野に入れた取組を行う必要がある。そこで、本取組では、PD研修を修了した教職員に対し、学生向けの講座や様々な活動を協働により計画・実行・評価・改善するステージを準備する。そして、そこで一定の成果をあげた教職員には教職員版のCPS、つまり Certificate for Professional Support の認証を行い、大学全体として学生支援体制の充実を後押しする。

4. 『四国の知』を集積するための e-Learning・遠隔講義環境の整備

林 敏 浩 (総合情報センター)

戦略的大学連携支援事業に本学が代表校として申請していた「『四国の知』の集積を基盤とした四国の地域づくりを担う人材育成」が採択された。その教育基盤である「四国の知」の形成について説明された。本事業では地域に根ざした高い専門性を持つ人材育成のため、教養教育科目群など四国にある大学の講義を e-Learning コンテンツとして共有・集積していくことが示された。今後、「四国の知」を活用した教育プログラムの検討や高精細遠隔講義環境の整備などが必要であり、このためには学内組織・連携大学の協力が不可欠である。

<当日配布資料>

『四国の知』を集積するための e-Learning・遠隔講義環境の整備

2008.12.16

香川大学 図書館・情報機構

林 敏浩 hayashi@eng.kagawa-u.ac.jp
鈴木正信 m-suzuki@cc.kagawa-u.ac.jp

本日の話題

- 『四国の知』の集積を目指して
 - 戦略的大学連携支援事業
 - 事業申請の経緯
 - 事業内容
 - 事業により得られる効果
 - 事業目的
 - 事業スケジュール
- 導入予定機材について
 - 遠隔講義システム
 - 遠隔会議システム
 - コンテンツ作成システム
- まとめ



戦略的大学連携支援事業

- 文部科学省が推進する事業
国公立大学間の積極的な連携をはかり、各大学における教育研究資源を有効活用することで、当該地域の「知の拠点」を形成する。
⇒ 教育研究水準の高度化、大学運営基盤の強化等

香川大学が代表校として申請した、
「『四国の知』の集積を基盤とした
四国の地域づくりを担う人材育成」
が採択された。

申請の経緯

- 四国の大学に求められるもの
地域に根ざした高い専門性を持つ人材の育成
 - 「四国は一つ」という意識
 - 四国の広域課題への理解
 - 学際的な専門知識
- 四国の大学の現状
 - 課題の多様さ・複雑さ → 地域のニーズに応える人材を、個々の大学が育成するのは、非常に困難。
 - 四国の大学に優秀な学生を確保するためには、全国の高校生やその保護者に対して「四国の魅力」を訴えていく必要がある。

事業目的

- 各大学の特徴を活かした様々な教育研究
例) うどん 稀少糖 お醤油 LED 瀬戸内海 …
- 四国の8大学が連携
徳島大学、鳴門教育大学、香川大学、愛媛大学
高知大学、四国大学、徳島文理大学、高知工科大学
- 「e-Knowledgeコンソーシアム四国」設立
情報通信技術 (ICT) を利活用して、各大学の講義を e-Learning コンテンツとして共有

⇒ 教育基盤『四国の知』の形成

事業内容

- 教育科目群
 - 教養教育科目群
特色ある科目を『四国学』として再構成
 - 学際的専門教育科目群
連携大学・大学院の専門教育科を集積
- 実施形態
 - 非同期蓄積型教育支援
基本的には e-Learning コンテンツとして集積
 - 同期配信型教育支援
e-Learningに馴染まない教育科目については、遠隔講義として実施する

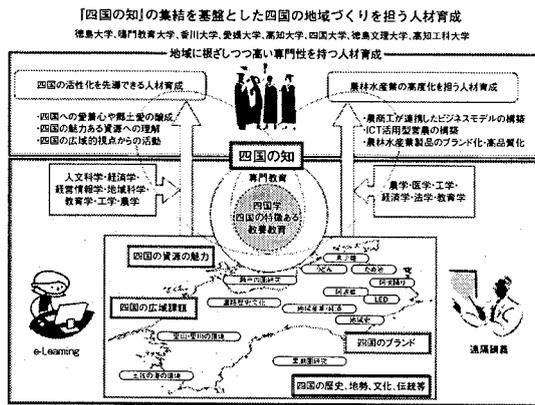


図1 地域が期待する人材育成

	H20	H21	H22	H23	H24
e-Learning カリキュラム・単 位化の検討		教育機養(四国学)コンテンツの活用	専門教育コンテンツの活用	四国の知を活用した教育プログラムの実施	
e-Learning 環境整備		四国の知を活用した教育プログラムの検討・試行	e-Learningコンテンツ開発	生涯学習の検討・試行	生涯学習コースの実施
コンソーシアム の設立		研究協力 取組によるコンテンツ 化	地域サポーター 会設置	地域と共同したe-Learningコンテンツ開発	社会人再教育の検討 (働きの免許更新講習など)
遠隔会議環境 整備	遠隔講義 環境の整備	遠隔講義の充実と そのコンテンツ化	遠隔講義 環境の整備	高解像データ通信による遠隔講義の実施	社会人再教育の 試行
	遠隔研修・セミナー の開催	共同研究 プロジェクト 委員会	共同研究 シンポジウム 等の開催	共同研究シンポジウム等の開催	
	対面研修・セミナー の開催	コンテンツ出版 委員会	コンテンツの出版		
応務委員会		四国学を通じた四国の魅力を全国への発信			

図2 平成24年度までのe-Knowledgeコンソーシアム四国の事業計画

事業スケジュール

- 平成20年度
 - 「e-Knowledgeコンソーシアム四国」設立
 - 『四国学』と「学際的専門教育科目群」の検討
 - 『四国の知』を活用した教育プログラムの検討
- 平成21年度
 - e-Learningコンテンツの開発
 - 高精細遠隔講義環境の整備
- 平成24年度まで継続
さらに発展させる → 社会人再教育 生涯教育...

事業により得られる効果

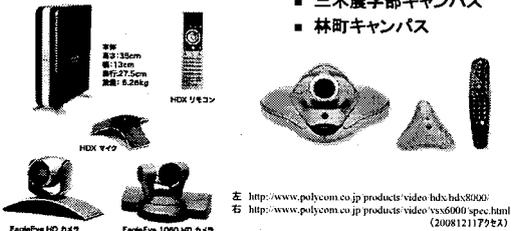
- 「四国の一員」であるとの意識が芽生える
- 「四国の知力」(知識・技能)が向上する
- 「四国の魅力」が全国に発信される

地域の課題を四国全体の視点から捉え
「四国は一つ」であることを意識しながら
「四国の自立的発展」に貢献する
「協調的な地域づくりを担う人材」の育成
が可能となる

遠隔講義システム(1)

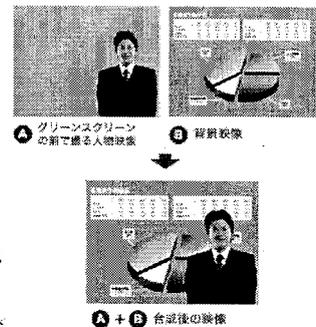
POLYCOM社

- HDX 8004 XLP (1台)
 - 幸町キャンパスに設置
- VSX 6000 (3台)
 - 三木医学部キャンパス
 - 三木農学部キャンパス
 - 林町キャンパス



遠隔講義システム(2)

- 自局を含めて、最大4拠点での多地点会議が可能。
- 1枚のディスプレイに、資料と人物の映像を同時に投影。
- 講師が絵画・写真・映像などを背景に説明可能。



遠隔会議システム

- Microsoft RoundTable
 - 参加者全員を 360 度パノラマカメラで映し出す。
 - 話し手をクローズアップして表示。
 - 臨場感のあるオンライン会議を実現。
(各キャンパスに1台)



- Microsoft Office Live Meeting
 - コンピュータとインターネット接続だけで、オンラインでリアルタイムの共同作業を実現。
(計20ライセンス)

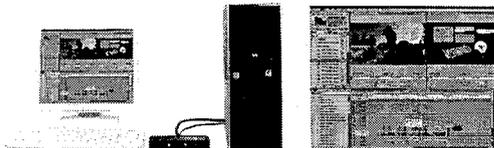


<http://www.microsoft.com/japan/office/2007/OCS/roundtable/default.aspx> (2008121177e2)

コンテンツ作成システム

- Comstation RT.X2 Premiere Pro CS3 TYPE
(Adobe Premiere Pro CS3 インストール版)

DVビデオテープなどに記録された映像を、パソコンに内蔵されている、ハードディスクなどの記憶装置にデジタルデータとして取り込み(キャプチャ)、それを専用のノンリニア編集ソフトで編集する。



http://www.comworks.co.jp/modules/nonlinerewrite/te_150.html
http://www.comworks.co.jp/modules/nonlinerewrite/te_153.html (2008121177e2)

まとめ

- 今後の予定
 - www ページ公開 (2008年12月中旬予定)
 - コンテンツ作成開始 (2009年1月下旬予定)
 - 設立シンポジウム開催 (2009年2月2日 全日空ホテルクレメント高校)
- 今後の課題
 - システム機材の導入・使用マニュアル作成
 - e-Learning コンテンツの作成・蓄積
 - 連携大学間における LMS の導入・調整
 - 運用体制の確立(ライセンス、単位認定の問題・・・など)

学内組織・連携大学の協力が不可欠

*

[参加者アンケート集計 第1部・全般的課題]

本研修会を受けて参考になったところ、お感じになったところなどをお書きください。

- ・ 高学年向教養科目群等が年々充実してきているように感じました。それについて、学生の希望はどのように反映されているのか質問したいと思いました。また、専門学習を行っている学生が受講し易い時間設定(集中・土日開講)を考える必要もあると思います。
- ・ 高年次配当の教養科目の充実は単位化(必修、選択必修)を作れないと、受講生の確保が困難であり、検討が必要だと考える。
- ・ 香大に移って間もないので、全学共通のシステムの概要が見渡せたのは大変よい機会でした。まだ自分にとっては関係分野の科目が何年かに1回あるいは毎年ということで回ってくるものではないかもしれませんが、より大きな視点から全学教育のありよう、自分の貢献できる科目など提案できると良いですね。

- ・学部のFDについて興味深かったです。
- ・CPSのシステムはどれくらい有効なのか疑問である。
- ・ファシリテーション能力の開発の取組について、新しいかつ重要な試みとして頑張ってください。プレゼンテーション→聞き上手→ファシリテーション。学生の能力開発のポイントと思います。
- ・CPSについては、初めて知った。実際に可能なのか疑問に残る。
- ・本学の学生に足りない力の分析をもう少し詳しく行いデータと共に提示する。
- ・e-learning について、コンテンツ作成システムを利用した教材作成に興味があります。科目領域に応じた e-learning があればいいと思います。
- ・「e-learning システム」などと同様に、オフラインでの学生支援システムも必要ではないかと感じた。
- ・『四国の知』の集積を基盤とした四国の地域づくりを担う人材育成に関して、四国の大学の特徴を活かした内容での教育研修で教育研究水準の高度化を目指しているが、世界的な研修を目指す研究とは、大いにかげ離れたことになるのではないかと思う。どちらを優先的に考えるべきなのか明確になっていない。矛盾があるように思える。
- ・全学的にどのような動きがあるかわかったこと。
- ・「主体性の段階的形式支援システム」、「四国の知」の講義のこと等、新しい大切な教育の可能性の開発を感じました。良いことですが、具体的方法論と共に実践へと望みます。
- ・GP、e-learning 等のプロジェクトの関しては、わからないなりに協力していく中で見えてくるものもあると思います。
- ・GPの内容がよくわかった。
- ・2、3、4よりも、5のオリエンテーションをもっと詳しく具体的にしたい。
- ・もう少しオリエンテーションをしっかり時間を取ってやるべき。
- ・全学共通教育に関する事務的内容。
- ・「全学共通」の意義を再確認できたが、受講希望学生を抽選で選ばねばならないなど、事務的なシステムを改善する余地がまだ多くあると思う。
- ・今回は、2～4の内容、いずれもつまらなかった。
- ・第1部2、3、4つまらない。必要ない。
- ・3の報告者がよかったです。
- ・特にございませませんが、ありがとうございました。
- ・INTERESTING
- ・変な質問には反論すべきです。
- ・残念ながら参考になるものはありませんでした。指摘があったシラバスは、もう少し形式を緩やかにするようにご検討ください。
- ・やや抽象的な概略的な発表が多かったので少し入りにくかったです。もう少し具体的な事例紹介を交えての形が欲しいと思いました。
- ・教室が広く後方は声が聞き取れなかったです。もう少し音声設備が整っているとよかったです。
- ・開催日時を複数回設けるようにしてほしい。あるいは録画したものを各学部に回覧して欲しい。参加したいのにその期日は都合悪いときに代案となると思う。

- ・受講学生のマナーをいかに指導するか。だれが、いつ、どこで、どのように。成功例は。
- ・受講学生の本気を引き出すには？ だれが、いつ、どこで、どのように。成功例は。
- ・教員の相互の啓発、意欲を引き出すには？ だれが、いつ、どこで、どうやって。
- ・学生の研究指導をする時間を確保することができるように負担を軽減する。
- ・教室の設備（大きな複数のスクリーン、教室後方のスピーカー、換気システム（冷暖房ではなく）を充実させて欲しい。

大学教育開発センターでは、日々の教育活動に直接的に役立つようなFDスキルアップ講座等も実施しています。以下のうちで参加したいと思う講座がございましたら、その番号に三つまで○をつけてください。

話し方講座……………	10	教養教育とは……………	5
講義法の基本……………	8	成績評価の方法……………	4
学生のメンタルヘルス……………	8	授業計画の立て方……………	2
授業での討論の進め方……………	6	キャリア教育とは……………	2
学生との関係づくり……………	6	職員との共同研修……………	2
レポート指導の方法……………	5	シラバスの書き方……………	1
パワーポイント入門……………	5	宿泊研修……………	0
一歩進んだe-Learning……………	5		

その他、本研修会や教育FD活動、全学共通教育のあり方、あるいは広く本学の教育に関して望むことなどがございましたら、ご自由にお書きください。

- ・CPSの研修として教員の講義への評価の仕方について指導して欲しい。
- ・現在の学生の評価態度は全くでたらめと思われる。
- ・欠席届の取扱いとか、補講のオブリゲーションの実際とか。
- ・幸町と他のキャンパスの間で遠隔講義ができるようにe-learningの整備を早くして欲しい
- ・シラバスは教員が自主的につくるものはず。フォーマットを決めなくてももらいたい。内容とデザインは最低レベルにしないとイケないのは不愉快。
- ・シラバスのフォーマット自体間違っている。文書全体が表になっているが、表は必要なときのみ使うもの。しかも表に縦線があるのも横書きの場合正しくない。
- ・シラバスは役所の公文書ではない。各科目に併せてデザインすべきもの。
- ・新任研修。
- ・個人情報を守るということで学生の期末テスト等を事務で保管することになったことに関して一言。結果は学生に答案を返却せず学生は自分のテスト上のミスがわからず、次の学習向上に繋がらない。また教員の採点ミスは全くないのであろうかという疑問も残る。学生が返却された答案を検討し、また、疑問があるときは教員にすぐ質問できることが大学に対する信用ももっと生まれてくると考えるが如何？ 多くの学生が答案返却を望んでいる！ 再考を！

FD研修会報告 第2部・分科会

A. 主題科目分科会

司会：最上英明（主題科目部会長・大教センター）、記録：川田学（調査研究部委員・教育学部）

出席者は13名であった。今回は授業担当者による実践報告をもとに議論が進められた。報告者は教育学部の柳澤良明教員であり、主題Vの「学校教育の国際比較」について、公開授業時のVTRを視聴しながら、柳澤教員がコメントを挿入するかたちで進行した。本授業は100名弱の受講生がありながら、学生の発表中心の授業構成となっている。学生の調べ学習と発表を中心とした授業であるが、まとめのところで教員が他の視点や専門的知識等を伝達していく。毎時1時間程度の発表だが、中には授業時間の殆どを発表に費やしてしまう班もあり、時間の管理が難しい授業でもあるということであった。フロアからは、柳澤教員がこのような授業形態をとるようになったきっかけについて、学生グループの構成や適正人数について、成績評価の基準について、専門用語の確認についてなど質問、意見交換がなされた。会場が固定機の講義室で、出席者が互いの顔が見えない環境であったのが惜まれるが、主題担当者としては有意義な時間であった。

[主題科目分科会・参加者アンケート結果]

主題科目の授業実践で苦勞なさっている点を具体的に二つあげてください。(来年度初めて担当される先生は、一般に大人数の講義についてのご苦勞をお書きください。)

- ・教室の設備が大人数教育に向いていない（小さいスクリーン、乏しいスピーカー類、換気システムの欠如など）。
- ・他のキャンパスから幸町地区に向かう場合、朝早く交流室に行くと開いてないことがある。プロジェクタの不具合等が発生したり、プリントの印刷をする時間が足りなくなる（講義開始が遅れる）。
- ・試験の答案をよく読んで、厳格に採点するのに時間がかかるため成績の締切に間に合わない。
- ・出欠。
- ・集中度の持続。
- ・主題とテーマをその時間のテーマとの関係、他の授業との関係をよく知らないだけに、不安に思うことがあります。
- ・主題が必要ということで、興味をもたないという考えを表明する学生の扱いに困ることがある。
- ・人文社会科学系（経・法・教）と理工系（工・農・医）混合にならざるをえないので、学生の関心が多様になり、授業内容が浅くなってしまう。
- ・大教室（200名程度）のため、教室の後ろの方の学生まで目が行き届かない。
- ・資料配付に相当時間がかかり、出席票もなかなか行き渡らない。
- ・一部の関心の薄い学生の態度が気になって仕方ない。自己責任とは思いつつも名前がわからないので平常点に反映させられない。

主題科目の授業実践で特に工夫・留意なさっている点を具体的に二つあげてください。(来年度初めて担当される先生は、一般に大人数の講義についての工夫をお書きください。)

- ・数式・化学式を多く使わない。使うときは効果的になったように思う。
- ・集中させるのに板書も重要と考えている。大きい字で書いている。
- ・授業態度の悪い学生への対応に苦慮しているが、これは授業評価を気にしているため。
- ・実物やビデオを取り入れて興味を引くようにした。
- ・レポートの評価とリターン。
- ・大人数の学生になることが多いので、個々の学生の興味を引き出したいと考えている → これはとても難しいと思う。授業の方法の工夫が必要なのだと思う。
- ・授業では特定のテーマに関する基礎的な内容に抑え、深く調べたい学生向けに必ず参考文献(本学図書館に収納されているもの)を3、4本挙げる。
- ・プレゼンテーションを使用する中で写真資料など視覚に訴えるものを取り入れている。またレジュメは書き込み式としてプレゼン資料は渡さない。
- ・作業の時間また隣席や前後で話し合いをさせる機会を設けている。

本日の分科会で参考になった点やお感じになったことをご自由にお書きください。

- ・柳澤先生の授業紹介で、主題科目でありながらゼミのような形式で成立していることが大変参考になった。
- ・主題でも(100名)ゼミ形式が可能である実践例が参考になった。
- ・やや特殊な例の印象を受けた。まずはスタンダードなもの工夫なども取り上げた上で、全体の半分くらいの時間で今回の例を取り上げてもよかったのではないか。
- ・ハンドブックの「授業のコツ」は参考になってありがたい。
- ・学生の主体的な取組の必要性。
- ・受け売りにならないなど事前の指導のポイント。

B. 教養ゼミナール分科会

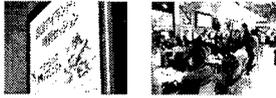
司会：鈴木利貞(教養ゼミ部会長・農学部)、書記：木村正司(調査研究部委員・医学部)

教養ゼミナールの分科会では、学生評価の高かったお二人の先生にご登壇頂いて、その取組みの一端を紹介してもらい意見交換の場を持った。参加教員はお二人の演者を入れて10名。前半は、経済学部経営システム学科の山田仁一郎先生による「演習活動の取り組み」で、経営学演習の基本コンセプトとして少人数教育での実践ケース開発を主眼に「四国アイランドリーグ」などのプロジェクト化した実践例を紹介された。教養ゼミナールのカリキュラム・プランニングの参考となるフィールドワークを取り入れた実例である。演習での予習、復習時間をどのようにとるのか、など質問があった。また後半の教育学部の瀬戸郁子先生は、教育というものを型に拘らずに考えましょう、とのスタンスから、実際の「エア縄跳び」のワークショップを組み入れた教養ゼミナール紹介ビデオを供覧して頂いた。ご自身、シラバスによる画一化や授業評価アンケートの定型化には批判的に思っているにも関わらず学生評価が高いことに触れ、少々困惑されているとの言が印象的であった。



演習活動の取り組み～経営学を学ぶ

全学共通教育の研修会
2008年12月16日



経済学部 経営システム学科
山田仁一郎



演習(山田ゼミ)の基本コンセプト

- 見直しの対象
 - マスプロ教育としての経営学
 - 机上の学問としての経営学
 - 全国一律内容としての経営学
- プロジェクト・コンセプト
 - 地域に根ざした地域の未来のリーダー (Region-based Future Leader) の育成
 - 1) 地域のビジネス現場の本質をつかみ、2) 密着しながら論理的に分析し、3) 具体的な問題をケースとして明確化する作業を主体的に実践する
 - ケース開発を中心にした学部の少人数教育のプロジェクト化



演習シラバスの内容(1)

- 商品サービスの開発、イノベーションや新事業創造を行う企業家活動戦略の研究を行います。特に、組織と戦略のマネジメントをテーマとして取り上げます。基礎となる調査方法や事業創造戦略の文献の精読からスタートし、数人でチームをつくり、フアロジェクト研究(ケース作成等)を通してテーマの理解を深めます。
- 毎週、テーマと報告者を設定して、全体で討議を行います。文献等の精読に加え、常にフレッシュな新商品・事業やイノベーションに関する情報を新聞・TV・ネットでチェックして持ち寄り、皆でその社会的意義や展望を検討しながら、ケースとしての価値を考察します。できるだけ現場へ足を運びます。地域の身近な企業や行政、NPO等の方々、起業家や経営者や商品開発の担当者などとお会いし、インタビューと起稿などの活動から定性的調査方法を習得します。



演習シラバスの内容(2):活動概要

- 4～6月: テーマに関連する基本文献の精読と組織調査の手法についての学習を行う。ケースディスカッションなどを通して、調査課題(リサーチ・クエスト)を見つけて、チームを編成する。調査テーマについての内容を前期合同ゼミに参加して報告する(6月)。
- 7月～: 企業訪問等のプロジェクト研究のフィールドワークを開始する。
- 9月末: 前期末には、チームごとでまとめレポートを作成・報告・提出する。
- 10～11月: 文献精読とケースディスカッション(プロジェクト研究の内容を高める)。プロジェクト研究成果は、他大学との合同ゼミ(12月には、神戸大学・関西学院大学・上智大学・中央大学・西南学院大学・北海道大学との経営学術論文交流会)において発表する。
- 12～3月: 個別演習のテーマ作成とともに各自の進路計画を明確化する。プロジェクト研究の内容や合同ゼミの経験が大きな自信となっているので、スムーズに進路計画に取り組めるようになっている。



経営学学術交流会の概要(今年の例)

第1部	テーマ	報告者	コメント
11:00-11:30	ベンチャーキャピタルの段階的投資を行う要因と	神戸大学 池田重治ゼミ	山田仁一郎ゼミ
11:30-12:00	ゼクニクから始まる専攻科の再編	西南学院大学 西田康生ゼミ	山田仁一郎ゼミ
12:00-12:30	アスリートのキャリア支援と企業との関係性について	上智大学 山田幸三ゼミ	西田康生ゼミ
12:30-13:30	の事例研究～		
第2部	昼食と休憩		
13:30-14:00	オールドタウンのリニューアル～多摩センターを	中央大学 根本忠宣ゼミ	池田重治ゼミ
	事例として		
14:00-14:30	アートプロジェクトにおける地域活性化～大地的	香川大学 山田仁一郎ゼミ	山田幸三ゼミ
	芸術家と何が起ったのか～		
14:30-15:00	リレーバンクからみる信用金庫～都市型信用金庫	西南学院大学 西田康生ゼミ	根本忠宣ゼミ
	の生き残り戦略		
15:00-15:30	～賑わいを創出せよ～金沢21世紀美術館を	上智大学 山田幸三ゼミ	山田仁一郎ゼミ
	ケースとして～		
15:30-15:40	休憩		
第3部			
15:40-16:10	買収は経営者予備軍と影響を与えるのか～予備軍	神戸大学 池田重治ゼミ	根本忠宣ゼミ
	と実務からの深さからのアプローチ～		
16:10-16:40	サブプライム問題の構造的要因	中央大学 根本忠宣ゼミ	西田康生ゼミ
16:40-17:10	産業における企業家活動の展開～小豆島オリ	香川大学 山田仁一郎ゼミ	池田重治ゼミ
	ブ産業事例～		
17:20-17:50	休憩		
18:30-20:30	懇親会		

香川大学は3年連続ベスト論文賞受賞!



経営学学術交流会の様相(今年のイメージ)





四国アイランドリーグ・フィールドワーク



- 四国アイランドリーグのフィールドワーク
- 創設者やスポンサーなど約10数名に対するインタビューや予備的調査を実施
- 経済産業局や関連学会からのサポートや評価



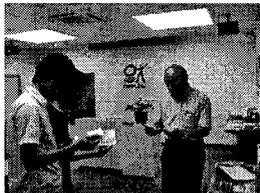
直島アートサイト・フィールドワーク&インタビュー



- ベネッセ担当者ならびに福武文化財団の広報担当、直島町長、地中美術館館長、ヴォランティアの方、町民など5名のインタビュー
- NHK国際部の依頼で外務省・広報媒体にも出演



新屋島水族館・日プラ：フィールドワーク&インタビュー



- 水族館館長、日プラ社長、屋島寺など5名に対するインタビューや予備的調査を実施
- ケース・プロジェクトの成果についての外部からの問い合わせも来ている

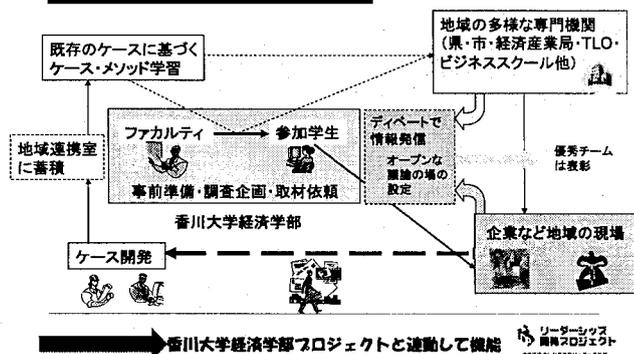


今年のケースの作成成果

- 小豆島オリーブ産業(100年)の検討
 - 1度衰退しきった小豆島のオリーブを再び生産、商品化、海外品との差別化に繋げるまでの経緯
- 瀬戸内海国際芸術祭計画のモデルとなっている越後妻有アートトリエンナーレの検討
 - アートディレクター北川フラム氏を共有する、35万人を動員した成功事例を検討するとともに、香川県の地域プロジェクトの実施計画などを吟味
 - 越後妻有・大地の芸術祭は、世界32カ国、アーティスト140人以上の集まりが10年にわたって持続し、総務大臣賞などを受賞



地域に根ざした未来のリーダー (Region-based Future Leader) の育成プログラム



演習プロジェクトの経済学部での意義づけ

- 特色ある経営学の少人数教育のアピール
 - 地域に対して「顔」と「テーマ」の見える教育
 - 教育成果(優れた人材)と調査・研究成果(=地域の現場理解の蓄積=ケース)とがアピールしやすい
- 地域の問題発見・解決方法の提案
 - 地域のビジネスの現場理解が就職後のキャリアを地元で形成したいという意欲や自信につながる
 - ファカルティと学生が一体なって地域に根ざした問題発見をし(形式知=ケースへと転換)、解決策を前提となる情報を整理し、実務や地域へ訴える
 - 解決方法などのフィードバックもケース・ディスカッションの場などを広くオープンにすることでアピール

「『話し合い、それが何になるの?!』という学生のからだの声をどのように聴き取りどのように返すかー初年度教育として教養ゼミナールに何を託すのか」

瀬戸郁子(教育学部)

I. 今のカリキュラムをめぐる精神風土が学べない(=関われない)学生を多産してしまった。

19年度後期と20年度前期に教養ゼミナールを担当した。図らずも両年度とも学生による授業評価が高いということで12月16日のFDで授業報告をすることとなった。一昔いやもう二昔も前のことで隔世の感を拭えないが大学教育の大綱化に端を発した授業の精選化はその後加速度的に進み、教育学部のカリキュラムは教員免許法の一層厳しい縛りの大鈍(なた)を振るわれて画一化の一路を辿ってきた。それに連れて授業に対する学生の態度はますます受身的になり「指示待ちくれない族」の汚名は教育学部のいわゆる典型的なまじめ学生のブランド名となり、次から次へと授業をこなすはしても自ら学んだことがないという現象が生じている。さらに学生による授業評価アンケートの定型化とシラバスの画一化の徹底が追い打ちをかけて、どの授業も同じ切り口で均されて数値化できる成果が求められ、教師はいつでも代替え可能なティーチングマシンとして見なされる様相を呈しているのが現況である。

このようなカリキュラムの精神風土は学生に授業とは事前に示された目的到達の契約であること、教師の引いたルールを教師の提示した方法で指示通りに従いさえすれば必ずや等しく目的に至るのが学習であるという裏カリキュラムを学ばせた。そして大方の学生は無理なく無駄なく無難に授業を通過する術(すべ)に長けるようになってしまった。こうして授業という営みにおいて自分が教師と共に当事者であるという認識と姿勢を見事に欠落させてしまい、自分がどのように教育されているのかや自分はどのように学んでいるのかに自らで気づき、他者との関係を取り結びながら多様な考え方を共有して、自分の考えの偏りを知り脱構築していく姿勢の習得から疎外されていった。片やこのようなカリキュラムの精神風土は教師に目的と方法とが一直線上にある明確な授業をしると迫り、優しい教育方便に乗せた分かり易い指導技術をと脅迫してくる。このためにはこうする、こうすればこうなるというルールを限り無くスリムにもっと明確にもっともっと分かり易くもっともっと優しく、と。この負のスパイラルは巡り続けマニュアル信仰の底無し沼に沈没していく。そうして学生は勿論のこと教師もすっかり「顔なし」になっていく。

II. 授業事例紹介:ワークショップ「エアー縄跳び」

私は「教育という名の病癖 - からだ・おと・ことば」というタイトルでワークショップとディスカッションを中心にした授業を行った。今の社会に蔓延する教育現象をからだとおととことばに

目をつけて取り上げ、関係性の展開に伴う場の問題として教育を捉え返そうとする試みである。それによって自分がこれまでどのように教育されてきたのか、今どのように教育されているのかという視点を浮かび上がらせ、自分の学びを相対化することで開かれる場を共有しようとするものだ。まずディスカッションが成立しない。学部もばらばらでお互い初対面だという事情があるにせよ何しろディスカッションができない。生きているのか死んでいるのか分からない。例えば「しゃべり場」(NHK教育テレビ)の録画ビデオを見せた。潮がすうっと引いていきしらあつとした空気になる。「話し合っただけ何になるの?!」と学生のからだ口々に言う。以前ならば教育学部の学生でも登場する同世代に自分を投影し見入っている姿があったものだ。自分の意見が無い。あるいは何をどう見ていいのか分からない。自分で考えようとするこらえ性が無い。たとえ意見があったとしても発言なぞしようものなら「空気を読めないヤツ」として浮いてしまう怖さがある。原発不明な同調圧力からの恐怖に常に晒されている。手っ取り早く正解を教えてよとからだにせがんでいる。だからといって教師が解説するとたちまち砂が水を吸う如く行ったきりで返って来ず、何事も無かったかのように一件落着するのは百も承知である。

ワークショップを一つ紹介します。もうかれこれ30年前のことになる。初めて勤めた大学で知り合った小学校教師の授業で縄なしの縄跳びを体験した。それ以来必ずと言っていい程授業で実践して学生の反応を見てきた。数年前東京大学の売れっ子の教育学者がテレビで紹介していたのを見たが、それから後劇作家の平田オリザ氏が演劇を目指す若者向けのイメージを共有させるためのレッスンでこの縄なし縄跳びをさせているのがコミュニケーションをテーマにした番組で流された。「エア縄跳び」、いつしか教育学部の学生がだれからとなくそう呼ぶようになった。エアという接頭語が流行っていたからだ、私はI. イリイチ流の批判精神を込めて「シャドウ縄跳び」と名付けている。

このレッスン場面の録画ビデオを見せる。全員が跳べるか跳べないかの二つに一つしかないのだ。私の授業では跳べない状況は一度も起こったことがないのに、平田氏のレッスンの若者たちはまるで跳べない。「だめだなあ」と平田氏にあっさり酷評されてしまう。どうしてこういう違いが出てきてしまうのか。自分たちは跳べて楽しめたのに?!。まず「どうしてだろう」と立ち止まるように促す。それからどこに原因があるのかを探ろうとさせる。それにはまず自分たちはどうしていたのだろうか、一体何が起こっていたのだろうかと振り返って自分たちの姿について相対化する視線へと促さねばならない。しかしこの道筋を教師である私が導くのではまたぞろ「指示待ちくれない族」を増やすことが落ちだ。そうではなくて、自然な場の設定や場の空気や活動の流れ方など、それらを引き受けて体現すると同時にそれらの中に溶け込んだ私の身体の雰囲気と身ごなしに照射されて学生らがふと気がつけば自分たちの様子を思い返している自分が居ると気づくようになる文脈が肝心なのだ。それには言うまでもなく私自身が授業の臨床の場において捲き込んでいる自分と捲き込まれている自分の相互反転を学生たちの様子に照射されながら自然にそうしてしまう力が鍵を握っていて、そうではなくて一歩間違えば「明るく元気にみんな仲良くなるために」なんかの下心見え見えな小細工の臭い芝居かやらせに墮落してしまうのだ。

これが平田オリザ氏のと私の身体の大きな違いであり、教育してやろう(解きほぐしてやろう)とする身体を決めた教師の身体は学べない学生を増産する方へ働く。平田氏の若者がそれを表している。場を左右し場に左右される身体が醸し出す雰囲気力は強烈だ。学生と向かい合ったその瞬

時に場の一切が決まる。学生の側でも感じているに違いない。実にぎりぎりの際どい話なのだ。この現象を拡げて見れば近代教育が見捨ててきた教育の源水流と言える力、即ち教職の生きがいに昇華される授業の醍醐味と言えるものの蘇生として語り返すことができるし、初年度教育である教養ゼミナールに私が託すものとして最後に述べたいと思う。

「そっちの端を持って」と声をかけて学生と二人で縄をまわし始める。勿論有るつもの縄である。「見える見える！」と絶叫する学生たち。ポンポンと一人また一人と縄へ入ってくる。無いはずの縄が見えているからかぶさって寄せては返す縄の波にからだを合わせて揺らして入るタイミングを伺おうとするしぐさが自然に出て来る。「うわあすごいすごい」と声がかかる。そんな臨場感につられて私は「うまいうまい」と思わずはしゃいでしまう。ヒールの高い靴やミュールを履いている女子学生が裸足になって跳ぶ姿もあったりする。それほど誘われ感が強いんだと思ったりする。ひっかかる（と言うのはおかしいかもしれないがそのように見える）とそのように縄も止まり、「ほんまみたいや」と声が漏れる。どこからが虚でどこからが実か境目も分からないシーソーをぎっこんぱったんする世界に「開かれる」。腕が疲れてくると交代する。私も跳ぶ。正直跳びたくてうずうずするのだ。まわし手が代わると雰囲気が変わる。それがまた新しい空気を呼び込むから交代して交代して続いて続いてその度に「開かれる」。いつしか「くーまさんくーまさん」とか「ゆうびんやさん」とかかつていつか誰かとどこかで遊んだ記憶の歌がどこからともなく湧いてきてそのように「開かれる」。あるいは2本にしたらどうかとか言い合っただけで色々試してみる姿が見えるようになったりすることもある。ここには授業は多重層に開かれて「在る」。

基本的には安全が確保できて騒いでも迷惑をかけないような場所を選んでいる。しかし最も場所選別に欠かせないのはそこで何かが起こりそうだという予感めいたものに誘われる感じがするかどうかである。のっぺりとしてだだっぴろいのは一番避けたい。ふと車道に目をやると向かい側の車線に1台のタクシーが停車していて運転手が窓から乗り出してこちらを見ているのに気づいた。不思議そうな表情である。「見られてるよ」と告げると学生たちは一時停止ボタンを押した画面のように固まった。恥かしいと言う学生も居ればもっと活発に動き出す学生も居る。下校中の小学生のグループに笑われたこともあった。縄の無いことに気づいた人は立ち止まる。学生たちは、今は授業だったんだと新たに気づかされる。それと同時に自分たちの姿を行き当たってフロアーになってしまった人々の反応に映されて見ることになる。授業はますます多重層に開かれて「在る」。

Ⅲ. 授業の非決定性に覚悟を決める — 教育の楽天的な信頼性に期待を込めて

学生を放下してただ遊ばせて喜ばせて受けをねらっていると読まれては困る。近代教育の考え方によって貶価視され捨てられてきた授業の醍醐味がここにある。知識や情報や技術のインプットとアウトプットを効率よく伝授する方法の開発に目が向いた授業からはマニュアル以上でも以下でもない学習が提供される。学生はそのような授業につき合う術をとくに心得ている。とは言え誤解しないでいただきたい。学生想いの心温まる厚情的で牧歌的な授業を情緒的に語ろうとしているの

ではない。

こうしてやろうああしてやろうとする学生への野心と、肯定でもなく否定でもなくそのまま受け取る信頼とが分離する間際の臨界点で捲き込み捲き込まれる。内部であり続けようとする営みとしての授業の彼方へ出ようと挑む。授業が弾(はじ)ける。今ここの次元が確かに向こう側へ開かれて「在る」。見えない何ものかが見えてくる。世界は膨張して生々しく立ち現われる。「何を学んだか言えないのにたくさんのことを学んだ気がする」「これから先の将来できっと思い出すことを学んだ気がする」と書いた学生の身体に染み込んだものの正体は私が覚悟を決めた授業の非決定性の力を語っている。オープンエンドとはあえて言わない。授業方策の術語の近視眼にからめ取られるから。教えるということはとりもなおさず「教えられなさ」を浮き彫りにすることに他ならず、教えられなさの深淵に「深く眼差して」なお教えられると信ずるぎりぎりの楽天さが尽きせず生き生きと湧き上がってくるのは、授業の非決定性からだを張りながらもその覚悟を楽しめるからだ。この教育の不屈に明るい信頼性を糧にしてこそ教師は明日に生きられるのである。

*

[教養ゼミナール分科会・参加者アンケート結果]

教養ゼミを担当されている先生におうかがいします。ゼミの計画や運営で、特に工夫・留意なさっている点を具体的に二つあげてください。

- ・個々の学生が授業に参加できるように心がけている。
- ・授業の進行が単調にならないように変化を付けている。
- ・できるだけ学生にとって興味あるテーマを選ぶということ。
- ・学生が自分たちで調べ発表し、そして話し合っ深めていくという〇〇を追求したい。
- ・学生が主体的に思考を深められるような課題を見つけさせる工夫。
- ・ゼミでビデオやDVDをみて考えてもらうこと。
- ・ゼミの参加者に必ず八十八カ所のうち一つ二つの寺院を訪れていただき、実際に歩いていただいた方に単位をあげることにしている。

本日の分科会の実践報告で、有益だと思われた点や印象に残った点をお書きください。

- ・もう少し、共通教育としてのFDを聞きたかった。
- ・他の学部の先生が行っている教養ゼミナールの内容を聞いてとても新鮮でした。まるで医学書の世界からカフカの小説に移ったような。総合大学でいるということが実感できました。
- ・いろいろな先生の実態をお聞きして、学べることが多くありました。
- ・授業に参加していることをダイレクトに体感させる場を、どのように創るかは大変参考になりました。授業とは生きられた関係性の変容の営みの現場であるというのも興味ある話であった。人とのコミュニケーションの中から、授業に参加していることを認識できる授業も興味がある。

質疑応答でふれることのできなかった疑問点、あるいは、教養ゼミに関連して大教センターへの要望などがございましたらお書きください。

- ・学生からの教員評価で「復習を行っているかどうか」というような項目は必要ないと思います。また画一的な評価法はマンネリ化してくると思います。
- ・四国以外の方も、例えば九州出身の方や、関東地方の出身の方なども多く受講してくれるので助かります。異なる文化圏の知りたいとやってきます。実際に四国八十八カ所の一つか二つをみんなで訪れるのにも、前段階として、本やビデオやDVDでよく予習をしておく（受講者みんなで勉強しておく）点が十分に持つ必要がありがんばっています。
- ・全学共通科目としてのFDではなく、主題・共通・教養・健康スポーツetcもう少し分けた分科会を開催して欲しかった。
- ・教える－学ぶの二極端の構造を踏襲して、教授会なども運営されているのだなあと感じました。根の深い教育問題をさらに研究して打開していきたいと思いました。

C. 既修外国語（英語）分科会

司会・記録：長井克己（大教センター）

第2部分科会のうち、「C. 既修外国語（英語）分科会：習熟度別クラス編成について」が、15：30～17：00に436講義室にて行われた。非常勤講師4名を含む14名の参加があった。まず水野英語領域教員会議代表のあいさつの後、大教センターの長井教員から農学部における習熟度別クラス編成の試行についての概要説明があった。過去数年のTOEICテストの結果と農学部の成績、クラス編成の方法などについても報告があった。次に農学部で授業を担当している水野教員から学生に対して行ったアンケートの結果報告があり、習熟度別クラス編成は少なくとも下位クラスでは圧倒的に支持されていることが報告された。分科会後半は英語担当教員の情報交換会として、教科書について、自習教材について、TOEICテストの取り扱いについて、成績評価方法について等の議題について、活発な議論が行われた。

D. 初修外国語分科会

司会・記録：羽白洋（調査研究部委員・大教センター）

香川大学FD史上初めて英語から独立した「初修外国語分科会」であったが、案内メールの遅れが原因か参加者は6名。内訳はドイツ語4名、中国語・韓国語各1名。フランス語からの参加がなかったのは残念だった。初顔あわせということで、今回は各言語の授業での問題点・学生の受講態度などお互いに情報交換に終始した。話題にのぼったものを次に羅列することで報告とする。統一教科書・統一試験の是非。再（再）履修者の取り扱い。英語力——特に文法力の不足、特に推薦入学者。教室内での問題児の扱い方。語学の授業でのレポート課題の意味。同じ教室にしながら連帯

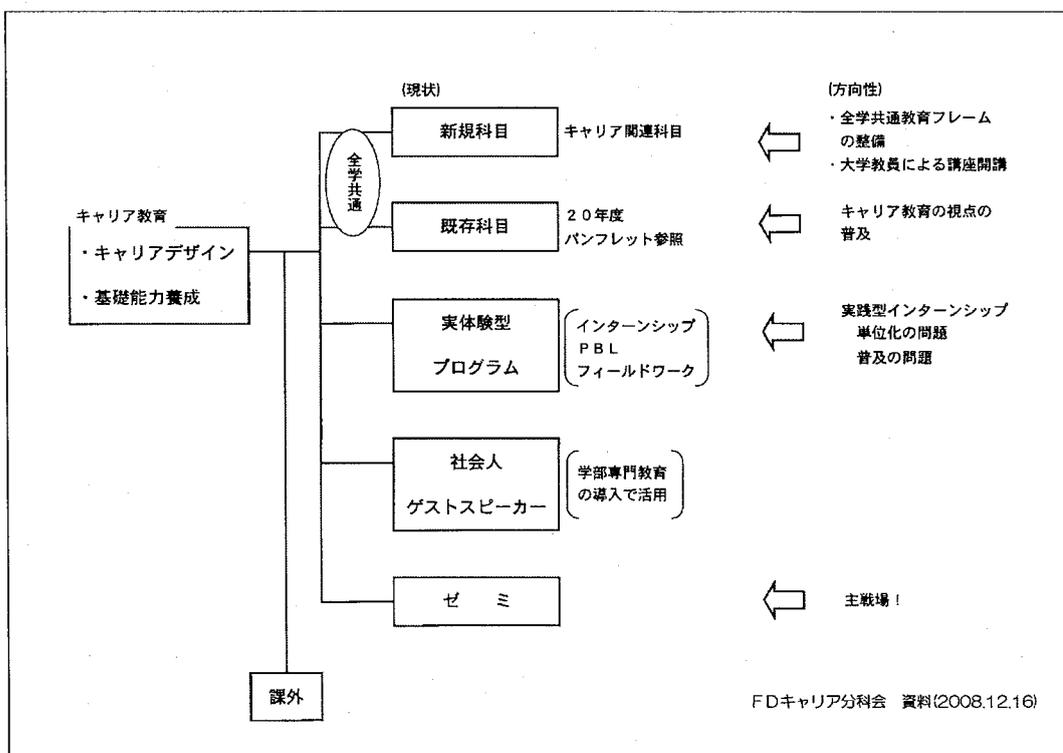
感のない学生。と書いてくると、学生のマイナス面が目立つが、3ヶ国語の枠を超えての対話は参加者それぞれに有益なものであったと思われる。

E. キャリア教育分科会

司会：津田弘道（キャリア支援センター）、記録：中西俊介（調査研究部委員・工学部）

キャリア支援センターの津田弘道先生の司会のもと、香川大学におけるキャリア教育の現状と問題点、今後の展開について議論を行った。参加者は医学部看護学科から4名、工学部から1名の計6名であった。最初に、参加者自身や所属部局におけるキャリア教育についての認識や現状が紹介された。医学部看護学科は目的養成的な学科であるが、学生は自分の将来についての認識がうすく、そのため、具体的な職業のイメージづくり、自分にあった職種を選択する力の涵養、キャリアの人生における意味づけに重点を置いた教育をしているとのことであった。工学部では、入学時に目的意識がうすい学生も多いため、インターンシップなどを通して自身の職業感を徐々に育成する体制をとっているとの報告がなされた。

その後、津田先生のキャリア教育についての考え方が示された。キャリア教育には、キャリアデザインに関する部分と基礎的能力に関する部分があること、学内にはキャリア教育に資する多くの教育資源が存在すること、現在の共通教育のフレームではキャリア教育の学内資源を動員しがたいことなどが提示された。いろいろな授業や専門分野が実はキャリア教育となり得ることを知ることができ、有益な分科会であった。



F. FD分科会

司会：葛城浩一（大教センター）、記録：中島洋樹（調査研究部委員・法学部）

近年、各学部においてFDが取り組まれるなか、問題点も浮き彫りにされ、新たに取り組むべき課題も出てきており、他学部のFDに関する創意工夫を参考にすることの有用性、また、大学間連携によるFDへの取組みも提案されてきており、その前提としても、まず各学部におけるFDの取組み状況について部局を越えて共有する必要性が確認された分科会であった。各部局10分程度の報告を行い、報告後にそれぞれ質疑応答が行われた。FD参加の位置づけ、実施組織、実施単位、大枠としての実施内容の射程について、各学部ごとの相違（それ自体、検討の対象となるべきである）が見られたものの、質疑において、いくつかの事項に共通の関心が寄せられた。とりわけ、「授業公開のあり方」「FD参加率の改善」「学生による評価のフィードバック方法」「学生の向学心の喚起」について意見交換が行われた。参加者は、他部局のFD活動を参考に、それぞれ今後の課題と対策を持ち帰ったことだろう。

FD実施状況

	全学	教育	法	経済	医	工	農
新任教員向けガイダンス	○	○					○
FDや学生支援に関する講演会やシンポジウム	○	○		○	○	○	○
シラバス作成や授業技法（ティーチング・スキル）に関する実践的な研修	○		○		○	○	○
カリキュラム改善に関する実践的な研修	○		○				○
学生支援に関する実践的な研修（学生との接し方研修等）	○	○		○			○
公開授業や授業参観	○	○	○	○	○	○	○
授業検討会		○	○			○	
授業コンサルテーション（授業に関する相談事業）			○				
授業評価アンケート（学生による授業評価）	○	○	○	○	○	○	○
学生と教員の座談会	○		○	○	○		○
学生による教育改革の促進（学生の声を反映する取組）	○	○	○	○	○		○
ニュースレターの発行	○						
教育実践の論文化支援（教育実践を掲載するジャーナルの発行等）	○	○					
学内経費に基づく教育改善事業（学内GP等）	○	○		○	○	○	○